

発掘調査ジオラマと遺構の記録

平城宮跡資料館は、来年の平城遷都1300年記念事業に向けて現在リニューアル工事をおこなっています。今回は、平城宮跡資料館に展示されている資料のうち「発掘調査ジオラマ」を紹介します。

このジオラマは、平城宮内裏東側を流れる基幹排水路SD2700とその周辺の遺構を発掘している様子を示したもので、1987年の資料館リニューアル時に作成されました。平城宮の廃絶から発掘を経て遺跡として整備されるまでを、6場面で説明しています。そのうちの4場面は発掘調査の過程を春（発掘直前）、夏（発掘のはじめの頃）、秋（発掘のおわりの頃）、冬（正確な図面の作成）として、季節の移り変わりとともに示しています。

この精巧なジオラマが作られてから約20年、発掘調査の基本的な作業はほとんど変わっていませんが、測量技術は道具や機械の進歩とともに変化してきました。かつては、遣方（やりかた）を組み水糸（よしみづいと）を張っておこなっていた実測は、衛星との交信で座標を求めるGPS測量と、水準器から直接標高を読み取る方法へ移行しました。遺構の記録の基準となる木製の地区杭も、金属製の長いピンに変わりました。

今回の資料館リニューアル後も、引き続きこのジオラマを展示する予定です。都の解体から復原整備までの流れ、調査員・作業員の奮闘ぶりもぜひご覧ください。

(都城発掘調査部 大林 潤)



遺構記録（実測）作業のひとつ
遣方から水平基準の水糸を



春 発掘直前の平城宮

平城宮が廃絶してから1200年。既に水田と化した平城宮の発掘が始まります。調査前には探査で遺跡の状況を調べます。



夏 発掘のはじめの頃

発掘調査が始まり、徐々に遺構が検出されています。ベルトコンベアを使用して土を調査区外に運び出し、遺物はコンテナにとりだします。





こま
張り巡らせたり、現在は使われていない地区杭なども見られます。



遺構面の標高を記録する作業
水糸から遺構までの高さを測定し、遺構面の標高を記録します。



秋 発掘のおわりの頃

いよいよ発掘も佳境。基幹排水路の掘り下げが進みます。検出が終わった部分は写真を撮って記録をします。



冬 正確な図面の作成

発掘が終わり、検出した遺構を記録します。記録の基準となる水糸を張るために測量をして遣方を組みます。

